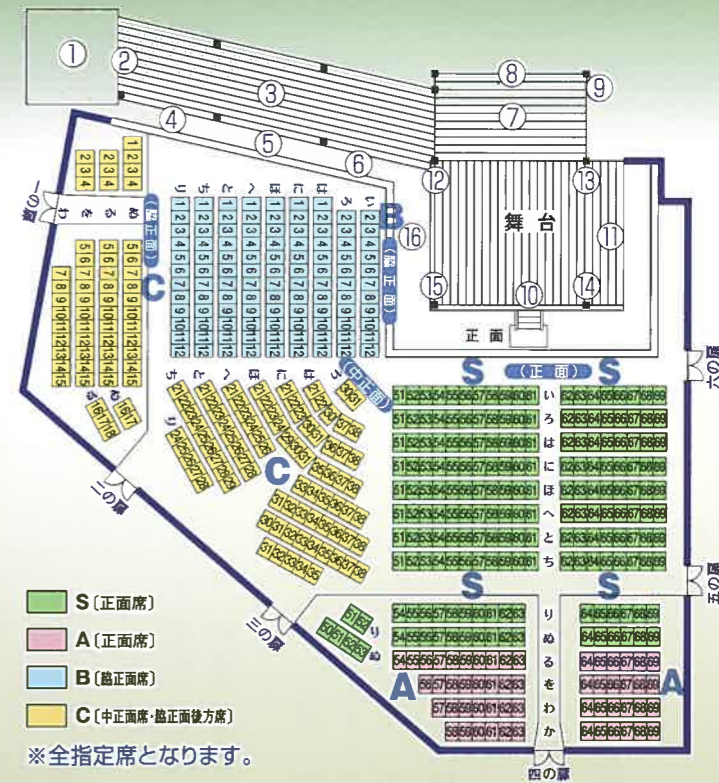


宝生能楽堂座席表(舞台平面図)



舞台平面図

- ① 鏡の間
- ② 揚幕
- ③ 橋掛り
- ④ 三の松
- ⑤ 二の松
- ⑥ 一の松
- ⑦ 後座
- ⑧ 鏡板
- ⑨ 切戸口
- ⑩ 階(きざし)
- ⑪ 地謡座
- ⑫ シテ柱
- ⑬ 笛柱
- ⑭ ワキ柱
- ⑮ 目付柱
- ⑯ 白州

能楽堂とは
能を上演する専用の舞台を能舞台といい、四本の柱に囲まれた三間(約6m)四方の本舞台を中心として、右側に地謡座、正面奥に後座と松の描かれた鏡板をもち、左側に長さ四間ほどの橋掛りを備えた独特な形をしています。
この能舞台は元々屋外にあり、野天の白州や対面する建物が客席になっていましたが、明治以降、屋根付きの舞台と付随する楽屋、客席ごと建物に収容され、能楽堂と呼ばれるようになりました。
昔ながらの屋外舞台も全国に数十カ所現存しています。

【チケット料金】(税込) **全席指定**

- ◆ S席.....8,000円
- ◆ B席.....5,000円
- ◆ A席.....6,000円
- ◆ C席.....4,000円

【チケット取り扱い】 **6月14日(月) 午前10時より**

- ◆ 電話(有人対応 平日10時~12時、13時~15時)
チケットスペース▶03-3234-9999
- ◆ インターネット
e+イプラス▶<http://eplus.jp/>(PC・携帯共通)

*販売は上記に限り承ります。
*本公演は未就学児のご入場をご遠慮しております。
*お客様同士の距離をとるため、一部お座りいただけない席がございます。

会場 宝生能楽堂 ※駐車場がございませんのでお車でのご来場はご遠慮下さい。
東京都文京区本郷1-5-9 TEL 03-3811-4843
【交通】 JR水道橋(東口) 徒歩3分
地下鉄都営三田線水道橋駅(A1出口) 徒歩1分
都バス/水道橋下車

- 【お願い】
- *上演中の撮影、録音、録画は固くお断り致します。
 - *上演中はアラーム及び携帯電話の電源をお切り下さい。
 - *出演者はやむを得ぬ事情により変更させて頂く場合がございます。
 - *今後の状況により、公演が中止または変更になる場合がございます。
 - *開場前のご来館につきましては能楽堂館外にてお待ち頂きます。

〈新型コロナウイルス感染防止対策にご協力下さい〉

来館前の検温実施	手洗い実施	場内における会話は極力お控え下さい
マスクの着用	手指の消毒	37.5度以上の発熱、咳、咽頭痛などの症状がある場合は来館をお控え下さい

*館内での持込みのお食事はご遠慮下さい。
*舞台進行演出が常と異なる場合があります。
◎対応策は、状況に応じて適宜変更していく可能性があります。
最新情報は能楽協会公式サイトにてご案内致します。

◆公演に関するお問合せ ◆ ※チケット販売受付は致しませんので予めご了承下さい。
公益社団法人能楽協会 東京支部 ☎03-5925-3871 / <https://www.nohgaku.or.jp/>

能親世流「鶴亀」
親世銭之丞

ユネスコによる
人類の無形文化遺産「能楽」

第四十三回

納涼能

能喜多流「通小町」
友枝 昭世

2021年7月16日(金)
開場/午後1時 開演/午後2時
会場 **宝生能楽堂**
主催/公益社団法人能楽協会東京支部

文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

ごあいさつ

昨年は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、お客様の健康・安全を第一に考え、やむなく公演を中止致しましたこと改めてお詫び申し上げます。

公演を楽しみにしておられた数多くの方々のご期待に応えられますよう本年は複合的な感染症防止対策を施し、公演回数はそのままに「第四十三回納涼能」として可能な限り昨年と同じ演者・同じ演目で開催出来るよう準備致しました。

お客様におかれましてはお暑い時期ではございますが、マスクの着用等、防疫対策にご理解ご協力を戴きまして、ご来場、ご観賞賜れば幸いに存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。

東京支部長 朝倉 俊樹

番 組

〈開演午後二時〉

ミニ講座

大島 輝久

能(観世流)

ツレ(鶴) 馬野 正基
ツレ(亀) 長山 桂三

シテ(皇帝) 親世鏡之丞

鶴 亀

ワキ(大臣) 殿田 謙吉
ワキツレ(従臣) 則久 英志
ワキツレ(従臣) 野口 能弘
アイ(官人) 三宅 近成

大鼓 柿原 弘和 大鼓 梶谷 英樹
小鼓 飯田 清一 笛 槻宅 聡

後見 武田 尚浩
野村 幻雪

地謡

観世 淳夫 小早川 修
角当 直隆 関根 知孝
奥川 恒治 山本 順之
伊藤 嘉章 西村 高夫

休憩 二十分

〈三時二十五分頃〉

狂言(大蔵流)

文 蔵

シテ(主) 山本東次郎

アド(太郎冠者)

山本泰太郎
後見 山本凜太郎

仕舞(宝生流)

忠 度

宝生 和英

地謡

大友 順
金井 雄資
佐野 登
小倉健太郎

仕舞(金剛流)

井 筒

金剛 龍謹

地謡

熊谷 伸一
坂本立津朗
今井 清隆
元吉 正巳

仕舞(金春流)

熊 坂

金春 憲和

地謡

辻井 八郎
本田 光洋
高橋 忍
山井 綱雄

休憩 二十分

〈四時四十五分頃〉

能(喜多流)

ツレ(小野町の霊) 長島 茂
シテ(深草の少将の霊) 友枝 昭世

通 小町

ワキ(僧) 宝生 欣哉

大鼓 亀井 広忠
小鼓 田邊 恭資 笛 藤田 次郎

後見 香川 靖嗣
中村 邦生

地謡

友枝 真也 友枝 雄人
佐々木多門 粟谷 明生
内田 成信 粟谷 能夫
大島 輝久 金子敬一郎

附 祝 言

〈終了予定 午後六時〉

能 鶴 亀

つるかめ

唐の玄宗皇帝の御代、うらかな新年を迎えた月宮殿では正月の祝宴が執り行われます。皇帝に仕える官人は皆に参内するようお願いをします。

臣下を引き連れた皇帝が不老門より現れ、新春の日の光を眺めると、万民は天に響くほどの祝福の声を上げます。錦、珊瑚、瑪瑙などたくさん宝物を設えた豪華な宮殿は華やかな様子。臣下は通例の如く鶴亀を呼び出だして皇帝の長寿を祈った舞を舞わせると、皇帝も御感のあまりに舞楽を奏して舞を舞います。上人たちも合わせて舞楽を奏すると、皇帝は国土山河草木に至るまで栄えることを予祝して、やがて長生殿へと帰っていかれました。

狂言 文蔵

ぶんざう

唯一の召使い太郎冠者の無断欠勤に、一度は腹を立てた主人ですが、京内詣で外出していたと聞けば都の様子を聞きたいと考え、許すことにします。京都の様子を話し、京に住む主人の伯父の家でお振舞いをうけた報告をする太郎冠者ですが、はじめて振る舞われた温糟粥の名を忘れ、主人が日頃読んでいた草紙の中にあるものを食べたと思ひ出します。主人は、太郎冠者が何を食べたのかを聞き逃げようと、長々と源平盛衰記の石橋山合戦物語を語ります。

仕舞 忠度

ただのり

藤原俊成の身内に居た者が俊成逝去後に出家し、須磨の浦に立ち寄り、一人の老人に出会います。老人は桜の木陰が一夜の宿になると詠まれた平忠度の和歌が千載集では、詠み人知らずとされた事を嘆き、姿を消します。仕舞では、その夜、忠度の亡霊が現れ、和歌に名を入れてほしいと懇願し、一ノ谷の合戦で討ち死にした有様をお見せします。

仕舞 井筒

いづつ

世阿弥の代表作で、極致の上花と自賛しています。仕舞では、在原寺に紀有常の娘の霊が業平の形見の直衣を着て現れ、共に過ごした往時を偲び、井筒の水にその姿を映して懐かしい業平の面影に浸ります。やがて明け方となり、女の霊は、花が凋むように匂いだけ残り、寺の鐘とともに消えてゆく有様を演じます。

仕舞 熊坂

くまざか

美濃の国で旅の僧が出会ったのは、大盗賊の熊坂長範の亡霊で、義経との闘いで落命した有様を見せ、供養を頼むと姿を消してしまします。仕舞では、義経との決闘の場面を、長刀を華麗に駆使して勇壮に演じます。

能 通小町

かよこまち

八瀬の里に住む僧の所に、毎日本の実や薪を届ける女がいます。ある日名を尋ねると、市原野に住む者と答えて消えます。僧が市原野に向いて叩くと、小野小町の霊が現れ叩いて喜ぶがそのあとを追って深草の少将の霊が現れ、小町を引き留めてその成仏を妨げます。生前少将は小町に恋をし小町にその気がないとも知らず小町に言われた通りに百夜通ったが、あとも一夜という夜に思いを果たせず無念の死を遂げ、地獄で苦しんでいるのでした。少将の霊はそのことを細々と物語り恨みを述べるが、僧の叩いて二人揃って成仏します。